

土蔵・博列建物研究の意義—学融合研究の視点から—

矢田俊文（新潟大学人文学部）

1 文献にみえる蔵

(1) 室町期京都の土倉と建物研究

文献史学の立場から建物としての土蔵の歴史について論じた研究に桑山浩然氏の土倉研究がある（桑山浩然 2006）。桑山氏の土蔵の歴史の説明は、以下のようなものである。

平安期には蔵書家を以て世に聞えた藤原頼長が特に造らせた書庫があるが、屋根は瓦葺、四方は板で囲い、その上に石灰を塗り、戸には更に剥落しないように蠣殻を塗る程度のものであった。当時の倉庫は災害に対しては無力なもので、このような倉庫建築に一時期を画したのは商人であった。その時期は恐らく平安末から鎌倉期にかけてであろう。

この時期は、まだ後代の土蔵造のように堅固な構造のものとは思えないが、少なくとも、板倉よりは火災にも盗難にも強かったであろう土倉によって、商人はその財産を保護した。

南北朝期に入ると、財産保管の良い手段を持たない公家や庶民は、自己の財産をこの土蔵に預けることを始める。南北朝初期の紛失状には、そのような状況ははっきりうかがわれ、更に、物品だけでなく、金銭の保管をも依頼するようになる。

桑山氏の説明を要約すれば以上のようなものとなる。桑山氏は、南北朝期以降、商人が堅固な土蔵を造り公家・庶民の財産を保管するようになったことと、この時期、商人である土倉が成立したことを同時期のこととして考えようとしている。

(2) 塗籠と倉

財産の保管機能をもつ建物は、倉とのみ呼ばれていたのではない。塗籠と呼ばれる建物もあった。

a 寛元4年（1246）11月日仁和寺用途支配状（1）

「自御倉沙汰」「自御塗籠沙汰」

b 嘉元3年（1304）9月13日越前国坂北荘年貢課役注進状（2）

「北御倉」「御塗籠」

a・bの倉・塗籠はともに年貢の収納場所を示している。a・bを見ると、倉と塗籠が同様の機能を持っていたこと、そして倉と塗籠はそれぞれ別の用語で表現されていたことがわかる。

c 「尋尊大僧正記」明応8年（1499）4月8日条（3）

一、興舜寺主青侍入道（源光）在所先日入小恣（盗）人、釜内之サラシ布數十反取之、方々挑方可如何哉之由、衆中辺披露、種々及評定、所詮挑手共令同道可出集会所、可有■文旨一決

了、ヌリコメニ置分之布ハ無相違之間、主方ニ可渡之云々、彼源光八十四五老者也、一段不便之間、可及此成敗歟」(注) ■は、口+告。

c は、盗人が入りサラシ布敷 10 反を盗んでいったが、「ヌリコメ」に置かれていた布は無事であったとある。盗難からまぬがれた「ヌリコメ」は、蔵と考えると間違いはないだろう。また、「ヌリコメ」の蔵なのであるから、「ヌリコメ」は壁に塗り込まれた土蔵であったと考えてよかろう。

d 「反古裏書」(4)

然トモ今度永禄七年ノ火難、法安寺焼失、退転ニ及フヘカリケレトモ、御宥免ノ芳恵、諸僧モ仰宗アルヘキ事ナルヲヤ、彼寺ノ御本寺薬師如来ハ年序ヲ経トイヘトモ開帳ノ義ナシ、コノ度ノ炎上ニ真像出現シタマフ、脇士四天マテ皆土仏ニテ在ス、若土仏ナラスハ争カ形像アヒノコルヘキヤ、本尊ノ面白ハアサヤカニ顕レ玉フ、ヌリコメノ内ニ安置アリト云々、ヤカテヌリコメニマタオサメ奉侍ル

同史料は永禄 11 年 (1568) に蓮如四男蓮誓の子頭誓によって著述されたもので、法安寺は大坂本願寺の近くにある寺院である。d から、法安寺の本尊は開帳が行われず、「ヌリコメ」に安置されていたことがわかる。d の記事から、「ヌリコメ」が火事に強い建物であったことがわかる。火事に強い建物であるから、「ヌリコメ」は塗籠が施された土蔵であったと考えてよかろう。

以上のことから、中世の塗籠と呼ばれた建物は倉と同じ機能を持ち、さらに火事や盗難に強く、壁に塗籠が施された土蔵であったと考えることができる。

(3) シロの蔵

次にシロの蔵について考える。e-f はシロの蔵が記される文書である。

e (元亀 3 年, 1572) 5 月 24 日直江景綱・山吉豊守宛鯨坂長実書状 (5)

「巳前御蔵衆迄申候鉄砲之玉葉」

e から、越後上杉家では、御蔵衆が鉄砲の玉葉を管理していたことがわかる。このことから、鉄砲の玉葉は蔵に収納されていたと考えると間違いはないだろう。

f 天正 6 年 (1578) 5 月 5 日とめ張宛河隅忠清・飯田長家連署状 (6)

「とそう (土蔵) 一紙」

f から、上杉家の土蔵には黄金が収められていることがわかる。

g 天文 13 年 (1544) 閏 11 月 18 日恵良若狭守ほか六名宛大友義鑑書状 (7)

「土蔵之材木」

g は、豊後大友氏が土蔵建築用材木の調達を玖珠郡の家臣衆に命じたものである (鹿毛敏夫 2006)。e・f は上杉謙信・景勝と関わる文書、g は大友氏と関わる文書なので、ここに現れる蔵・土蔵はシロの蔵と考えるとよかろう。また、鉄砲の玉葉を保管している場所は、櫓 (矢倉) である可能性もある。鉄砲の玉葉を保管するのであるからその蔵は土蔵の可能性が高い。e・f・g から、戦国期権力は、土蔵を作り、鉄砲の玉葉や黄金を収納していたことが確認できる。

2 考古学の成果と問題点

(1) 博列建物研究の現段階

城郭遺構である大内氏館 (山口県山口市)・感状山城 (兵庫県相生市)・置塩城 (兵庫県夢前町)・御着城 (兵庫県姫路市)・枝吉城 (兵庫県神戸市)・端谷城 (兵庫県神戸市) 伊丹城 (兵庫県伊丹市)・高

屋城（大阪府羽曳野市）・若江城（大阪府東大阪市）では、埴列建物が検出されている（置塩城跡調査委員会 2002、神戸市教育委員会 2005）。この埴列建物は、城の蔵の可能性が高い。

城の蔵以外でも、草戸千軒、京都、堺、摂津平野で埴列建物が検出されている（大阪市文化財協会 1999、鈴木康之 2001・2005、續伸一郎 2001・2004・2005、土井和幸 2002、小谷正樹 2005、堺市博物館 2006、山本雅和 2002、広島県立歴史博物館 2004、国立歴史民俗博物館 2005）。城以外で埴列建物が検出される地点は集散地である。この草戸千軒、京都、堺、摂津平野の埴列建物も土蔵の可能性が高い。

大内氏関連町並遺跡でも埴列建物が出土している。大内氏館だけではなく、町でも土蔵が作られていた（8）。

3 土蔵・埴列建物研究の課題

(1) 土蔵と櫓（矢倉）

すでに私は、近世初期道具帳の検討から、シロの櫓（矢倉）には、武具だけではなくさまざまなものを収納していることを明らかにしている（矢田俊文 2006）。近世初期の櫓は土蔵としての役割をはたしていた。土蔵と櫓を区別して研究をしない方がいいのではなかろうか。大内氏館のように平地のシロにも土蔵はあった。上記の埴列建物である櫓は土蔵と同様の機能を持つものとして議論すべきであろう。

(2) 中世前期の倉・塗籠と中世後期の土蔵

先に紹介したように、桑山氏は、中世前期の蔵は、財産保管機能を果たすには十分なものではなく、南北朝期頃から、商人によって堅固な土蔵造りが完成し、火災・盗難から守られる建物が出来上がったとする。果たして、それは考古学・建築史研究の側から考えると正しい理解であろうか。

桑山氏は、藤原頼長が特に造らせた書庫の屋根は瓦葺、四方は板で囲い、その上に石灰を塗り、戸には更に剥落しないように蠣殻を塗る程度のものであったとするが果たしてそうなのか。考古学・建築史研究の理解とそれは合致する理解なのであろうか。これらの課題は文献史学だけでは明らかにできない課題である。

(3) 西日本の土蔵（埴列建物）と東日本の土蔵

今日紹介した考古学の事例をみると、東日本では現時点では埴列建物の報告例がない。これは何を意味するのであろうか。今日紹介した史料 e・f は東日本の土蔵の文献事例である 16 世紀後半の文書ではあるが、東日本のシロに土蔵があったことがわかる史料である（9）。東日本に土蔵造りの建物がなかったとは考えにくい。現在西日本で出土している土蔵は、埴列建物のなかから選択された遺跡である。東日本で埴列建物が出土しないことと土蔵が存在しないことは同じ問題ではない。中世東日本の土蔵の問題は独自に考えなければならない課題である。

注

- (1) 仁和寺文書『鎌倉遺文』6766 号
- (2) 東山御文庫記録『福井県史資料編 2 中世』
- (3) 『大乘院寺社雑事記』。片桐昭彦氏のご教示による。
- (4) 『真宗史料集成』第 2 巻。片桐昭彦氏のご教示による。

- (5) 上杉家文書『上越市史 別編1 上杉氏文書集一』1101号
- (6) 伊佐早文書『上越市史 別編2 上杉氏文書集二』1495号
- (7) 大友文書録『増補訂正編年大友史料』18
- (8) 大内氏関連町並遺跡・大内氏館の埴列建物については、古賀信幸氏のご教示による。
- (9) 皆川義孝氏は、長享元年(1487)10月22日、江戸城の城壁を塗るための土が品川から小舟で運ばれたことを明らかにしている(皆川義孝2004)。

(参考文献)

- 伊藤ていじ 1980, 「都市の蔵」川添登編『蔵』文藝春秋
- 太田静六 1959, 「文倉と防火対策」『日本建築学会論文報告集』63
- 大阪市文化財協会 1999 『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1996年度—』
- 置塩城跡調査委員会 2002 『置塩城跡総合調査報告書』夢前町教育委員会
- 鹿毛敏夫 2006, 『戦国大名の外交と都市・流通』思文閣出版
- 桑山浩然 2006, 『室町幕府の政治と経済』吉川弘文館
- 神戸市教育委員会 2005, 『端谷城跡—平成17年度現地説明会資料—』
- 国立歴史民俗博物館 2005, 『東アジア中世海道』国立歴史民俗博物館
- 小谷正樹 2005, 「埴列建物の基礎を発見!—焼けた柱がそのまま—」『堺埋蔵文化財だより』18
- 堺市博物館 2006, 『茶道具拝見—出土品から見た堺の茶の湯—』
- 鈴木康之 2001, 「中世の町における建物復原をめぐって—広島県草戸千軒町遺跡の出土資料から—」『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究』(1998年度—2000年度科学研究費補助金〈基盤研究A [1]〉研究成果報告書・研究代表者玉井哲雄)
- 鈴木康之 2005, 「草戸千軒をめぐる流通と交流」柴垣勇夫『中世瀬戸内の流通と交流』塙書房
- 土山健史 1992, 「埴列建物について」『関西近世考古学研究』3
- 續伸一郎 2001, 「堺の町と町家」『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究』(1998年度—2000年度科学研究費補助金〈基盤研究A [1]〉研究成果報告書・研究代表者玉井哲雄)
- 續伸一郎 2004, 「堺環濠都市遺跡-SKT263地点-立会調査報告」『堺埋蔵文化財だより』17
- 續伸一郎 2005, 「堺環濠都市遺跡-SKT263地点-立会調査報告Ⅱ」『堺埋蔵文化財だより』18
- 土井和幸 2002, 「会合衆の会所跡か?—堺環濠都市遺跡263地点の調査成果—」『堺埋蔵文化財だより』16
- 広島県立歴史博物館ほか 2004, 『津々浦々をめぐる—中世瀬戸内の流通と交流』
- 皆川義孝 2004, 「中世考古学のための梅花無尽蔵解説 城の施設・江戸城の城壁」『中世考古学文献研究会会報』2
- 矢田俊文 2006, 「考古学のための文書解説 近世初期の城の蔵」『中世考古学文献研究会会報』6
- 山上雅弘 2005, 「関西周辺の戦国末期城館における建築技術動向」『森宏之君追悼城郭論集』織豊期城郭研究会
- 山田幸一 1981, 『壁』法政大学出版局
- 山田幸一 1985, 『物語ものの建築史 日本壁のはなし』鹿島出版社
- 山本雅和 2002, 「中世京都のクラについて」『研究紀要』8, 京都市埋蔵文化財研究所
- 夢前町教育委員会 2006, 『播磨置塩城跡発掘調査報告書』